

近代イギリス田園都市運動の展開

— ロンドンの田園都市と田園郊外 —

大 島 葉 月

はじめに

19世紀末イギリスで、ある一人の社会改良家が「田園都市(Garden City)」を考案した。それが都市づくりへの関心を引き起こし、田園都市運動(Garden City Movement)として広がっていった。そこから田園都市をはじめ、田園郊外や郊外住宅地などの開発が起り、都市そのものの概念やその様相は変化していく。田園都市論は都市工学的視点からだけでなく、多角的な観点から高く評価されており、非常に影響力を持つものであることがこれまでの研究から明らかになった^①。本研究では田園都市運動に焦点を当て、近代イギリス(主にロンドンとその周辺部)における田園都市論を巡る動きを芸術文化論の視点から考察する。田園都市や田園郊外という新しい都市を目指した人々の思想や、理想としたイメージが都市にどのようなに反映されたのか。そしてそれがどのような都市景観を生み出したのか。実現した田園都市、田園郊外の実際から探る。

まず田園都市運動の起こった背景を探る。それから田園都市運動を田園都市建設と田園郊外建設の二つの流れから論じる。構想どおりの田園都市を実現することは困難であり、多くの問題に直面しながら新しい都市の形は模索されていく。その中で田園都市は都市の新しい可能性を示し、快適で上質な生活をイメージさせるものであったと言えるだろう。

1. 背景—近代の急速な都市化

田園都市運動は19世紀末、エベネザー・ハワード(Ebenezer Howard, 1850-1928)が田園都市論を提唱したことに始まった。ハワードが新しい都市のアイディアを練り、それを実現しようとしたその背景からまず見ていこう。

イギリスでは18世紀末に産業革命が起こり、そこから都市化が急

速に進んだ。都市部に人口が集中し、著しい人口の増加が見られた。19世紀から20世紀にかけてイギリス（イングランド、ウェールズ、スコットランド）の全人口は約四倍に増加した。² 住宅の過密は公衆衛生の悪化をもたらし、伝染病などの問題を引き起こした。また無秩序な都市開発がなされ、鉄道の発達がスプロール化を促進した。そのように当時の都市には多くの問題が溢れ、特に貧しい労働者たちの生活環境は劣悪なものだった。それを改善するために法律を定めるなどの措置も当然取られたが、急激に現状を変えるものではなかった。そこで国家ではなく民間の人々が、都市を変え、さらに生活を変えようと動き始めたのであった。

田園都市運動を考察するにあたり、その運動を大きく二つに分け、①ハワードによる田園都市の建設、②田園郊外の建設、の二つの文脈から論じることとする。次節ではまず田園都市の建設から見ていく。

2. 田園都市—ハワードの構想から実現まで

先に述べたように、田園都市運動はエベネザー・ハワードというひとりのイギリス人のアイデアから始まっている。彼は1898年『明日—真の革命に至る平和な道 (Tomorrow: a Peaceful Path to Real Reform)』を出版した(1902年に題を改め、『明日の田園

都市 (Garden of Cities of Tomorrow)』とする)。そこで理想の都市「田園都市」の構想を明らかにする。ハワードは社会改良に興味があり、社会を変えるためにまず都市を変えようという考えを持っていた。ハワードは都市計画家ではなかったため、その道ではいわば素人だった。⁴ しかし彼の理論は斬新で、理想の都市をイメージさせる力を持つものであった。ではハワードが思い描いた田園都市とはどのようなものだったのか。具体的に見ていこう。⁵ 6千エーカーの土地に千エーカーの市街と5千エーカーの農地地所をつくり、農地が市街を環状に囲む。計画人口は都市に約3万人、農地に約2千人とした。住居と職場が近接し、その他の生活に必要なことは全てその都市内で行えるよう設計された自己完結型の都市が想定された。最終的には、田園都市6つと中心都市で都市群を構成するという壮大な計画であった。さらに運営は民間の非営利の会社によってなされ、その収入はコミュニティのために還元されるような仕組みを説いた。そして住民から運営委員会を選出するなど、住民が直接運営や管理に携わることを求めた。

1899年に田園都市協会 (Garden City Association) が設立され、田園都市づくりは始められた。1902年に設立された田園都市開発会社 (Garden City Pioneer Company) は、翌年田園都市に適当な土地としてレッチワース (Letchworth) を購入し、そこに第一の田園都市レッチワース・ガーデンシティ (Letchworth

Garden City) を建設した。その設計にはレイモンド・アンウィン (Raymond Unwin, 1863-1940) とバリー・パーカー (Barry Parker, 1867-1947) の二人の建築家が携わった。1919年には、第二の田園都市ウェルウィン・ガーデンシティ (Welwyn Garden City) が建設される。ウェルウィンはロンドンから約32キロ離れており、レッチワースより20キロほどロンドン中心部に近い場所に位置する。設計はアンウィンたちではなく、建築家ルイス・デ・ソアソン (Louis de Soissons, 1890-1962) によって行われた。

レッチワースとウェルウィンは同じ田園都市論に基づいて計画された都市だが、それらは少し異なった表情を持つ。田園都市論それ自体は具体的なデザインに言及しておらず、ある枠組みを建設が決定した土地にあてはめて応用することを提案している^⑤。そのため設計に携わった建築家の解釈と建設した土地の本来の形によって、それぞれ独特の特徴を持った都市が出来上がった。レッチワースでは、その自然地形をなるべくそのまま活かすようにデザインすることが重視された。またイギリスの農村部に残る伝統的な建築様式にこだわりを持っている^⑦。一方ウェルウィンは、ハワードが示したダイアグラムに忠実であることが特徴的である。デザインはジョージア朝様式で統一されていた^⑧。

さて、ハワードの理論に基づいて実現した田園都市で暮らす人々やその生活はどのようなものだったのだろうか。まずレッチワース

について見ていく。田園都市の原則の中に、住職近接、すなわち都市の中に住居と職場を含み、その都市内で暮らし、働くというものがあつた。その原則に従うと、様々な職を持つ人々が住み、社会的な均衡が生じる。ハワードの案を具現した田園都市では当然そのよ

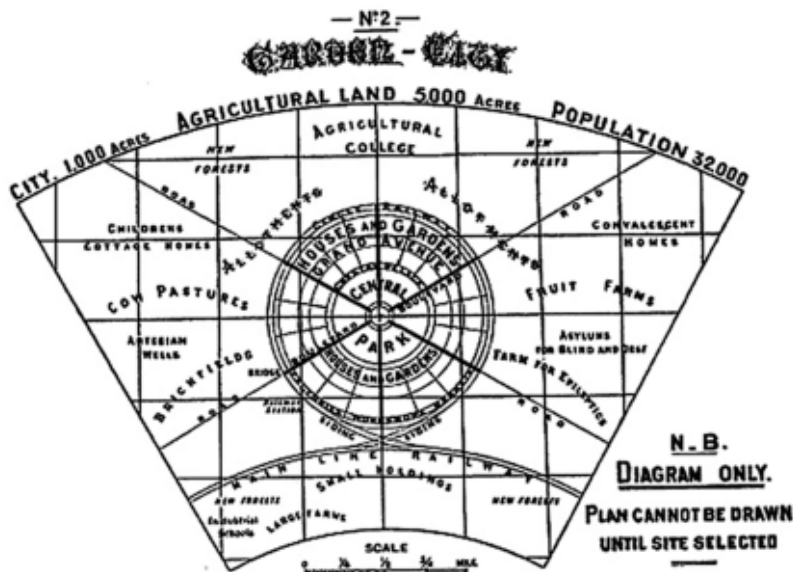


図1. ダイアグラムNo.2 (出典:ハワード、1969)

うに住人の社会的均衡が見られるはずだったが、現状は異なった。実際、田園都市に住むことができたのは富裕層に限られた。基本的に住宅は贅沢につくられ、労働者用の住宅も労働者たちにとっては家賃が高すぎたのである。実際「住宅は贅沢に建設され、より貧しい労働者を排除している」と批判された。だがアンウィンは自身が認める最低限の基準を守ることを重要視した。価格を下げるために基準を下げることは許されなかった。「田園都市が何らかのもののためにあるとすれば、それはこのため―そこへやってくるあらゆる家族のための快適な住宅と庭―である。これは引き下げることのできぬ最低条件である。」¹⁰田園都市の住宅に住むためには労働者の賃金を上げる必要があるとアンウィンは述べた。だがそのような労働問題は早急に解決されるものではなかったから、建設されてすぐにそのような低賃金の労働者たちが入居することは現実的には考えられなかったと言える。そういう意味で、労働者は実質、住人の対象としては見られていなかった。当然、入居できたのはある一定水準以上の生活ができる層に偏った。

当時は郊外住宅地が普及し始めた時期でもあった。都心の住環境が悪化すると、郊外に住宅を求める人々が増加し、郊外住宅地の建設が次第に盛んになっていった。ロンドンで最初の地下鉄が認可されたのは1854年のことで、それ以降地下鉄の路線沿いに郊外住宅地が開発されていった。¹¹そのように郊外に住居を求める人々の目

も当然、田園都市へと向けられた。そして建設する側もそれを意識していたであろうから、多少贅沢なつくりにしても成功する見込みはあった。

結局レッチワースは工場の誘致が十分でなかったことなどの理由から、自立都市としては成功しなかった。さらにロンドン中心部から55キロも離れていたため、ロンドンへの通勤圏としては当時は遠すぎる場所だった。そのため都心のベッドタウンとしては機能しなかった。しかし田園都市というのは、まずその響きで十分に新しさや快適さをイメージさせ、富裕層をひきつけた。実際「条例開発のあらゆる外観を打ち破った」というデザインは他にはないものであった。そして結果的にそこは都心から少し離れた高級住宅地となったのである。

第二のウエルウィンも実際は建設当初から富裕層が集まり、社会的均衡はここでも実現しなかった。また、ウエルウィンはその都市の経営に苦しんだが、それを解決するために取られた措置¹³によって田園都市の原則から少しずつずれていくことに住民は反対しなかった。¹⁴富裕層向けの住宅開発に重点を置いたのも経営安定のためであった。そしてついに1948年のニュータウン法の適用を受け、ウエルウィン・ガーデンシティ会社 (Welwyn Garden City Corp Ltd) は解散し、ニュータウン開発公団によって開発が進められることとなったのである。ガーデンシティという名前を残しながらも、

真の意味で田園都市ということは難しくなった。

3. 田園郊外―有機的コミュニティを目指して

レッチワース・ガーデンシティが建設されたのとはほぼ同時期に、「田園郊外（ガーデンサブurb Garden Suburb）」と呼ばれるものが計画され、ハムステッド（Hampstead）に建設された。ハムステッド・ガーデンサブurb（Hampstead Garden Suburb）はヘンリエッタ・バーネット（Henrietta Barnett, 1851-1936）という女性によって考案された。バーネットは社会改良家として若くから活動しており、社会福祉や貧困問題等に直接関わってきた人物である。彼女は次第にあらゆる年齢や社会の層の人々が同じ場で暮らすコミュニティの実現の夢を抱き始める。その夢をハムステッドで実現しようとした¹⁵。夫サミュエルの友人だったレイモンド・アンウィンに設計が依頼され、ここでもパーカーと二人で設計が行われた。レッチワースで彼らの案が選ばれた一年後の1905年に第一案を作成した。アンウィンはレッチワース、ハムステッドの両方で、住宅と緑地をバランス良く含んだ変化に富むデザインを心がけた。というのも、それまで労働者に供給されていた、いわゆる条例住宅地を悪い見本だと考えていたからである¹⁶。狭い土地にぎっしりと詰め込んだ長屋住宅は柵状に配置され、その景観は単調で退屈なものだった【図2】。

さらに密度は高く、共有で使用できるオープンスペースのようなものはなかった。アンウィンはそのような労働者向けの住宅の最低基準を上げることが目標としていた。アンウィンのイメージする低密度の住宅とオープンスペースを持つ住宅地の構想がレッチワースとハムステッドで現実のものとして描かれた。1906年にはクック（袋小路）の開発を可能とした初の法律、ハムステッド・ガーデンサブurb法（Hampstead Garden Suburb Act）が可決し、ハムステッドにはクルドサックが有効に用いられている。これは後のラドバーンの手法につながるところがある¹⁷。

当時オープンスペースのような形で都市部に人工的に自然を取り入れるという方法はよく見られた。労働者階級が暮らす空間に共有で使用できる余暇の場が提供されるということは、彼らの生活に大きな変化をもたらした。余暇の場が与えられるということは、すなわち余暇を持つことを許されたことを意味するからだ。そこから自然が「健全な息抜きの場」、あるいは「ゆとりある生活の象徴」としての意味を持つていたと考えられる。実際に自然そのものを楽しむかどうかは別として、自然が余暇という贅沢を与えるものの象徴となっていたのである¹⁸。ハムステッド・ガーデンサブurbは広いハムステッド・ヒース¹⁹に隣接していることが非常に特徴的である。ガーデンサブurb建設にその土地が選ばれた背景には、そのハムステッド・ヒースを保護するという目的があった。鉄道の延伸によりハム

ステッド・ヒースの自然が破壊されることを危惧したヘンリエッタ・バーネットが、そのヒース約80エーカー（32ヘクタール）を購入するよう県議会に対して訴える運動を起こしたのである。当時都市化が進行すると同時に、自然破壊も著しく進んでいた。もともとそ

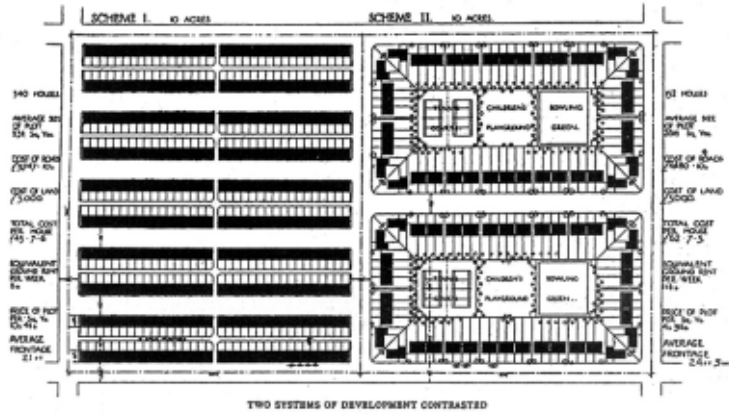


図2. 条例住宅地（左）と田園都市（右）のモデル（出典：西村幸夫編、2005）

の土地の人々が親しみ、守ってきた自然を都市開発によって失ってしまうことを危ぶむ人々もいた。ここでのヒース保護運動は、都市化や工業化に警鐘を鳴らすものでもあったのだ。このように自然の存在は複数の意味を持っていた。

田園郊外が原則的に住宅地であって、自己完結型の都市ではないということが田園都市との最大の相違点である。ハムステッド・ガーデンサバープはロンドン中心部から約6キロと大変近いため、ロンドンのベッドタウンとしての役割を持っていた。またハムステッドは、レッチワースよりも社会的均衡という目標を明確に掲げていたが、それにも拘わらず、成功させることはできなかった。まず初めに、予想していたようには入居者が集まらなかった。ハムステッドはロンドンの中心に充分近く、労働者が通勤できる場所と考えられていた。しかし労働者にとって、勤め先の近さは他の条件に優先するものであったため、都心に近いといえど郊外に住み都心に通おうとする人はまだ少なかったのである。それはバーネットの誤算だった。彼女が予想していたほど、ハムステッドの立地条件が労働者にとっては良いものではなかった。ガーデンサバープには労働者たちではなく、より富んだ人々が主に居住した。そのため、全体的な計画の見直しが必要で、中流階級向けの住宅地へと設計の変更がなされた。アンウィンが解雇され、代わりにエドウィン・ラッチェンズ (Edwin Lutyens, 1869-1944) が設計を担当することになった。ラッチェン

ズは基本的にはアンウィンの計画をそのまま受け継いだ。しかし、労働者のために設けられた施設のほとんどは建設中止となった。そして中流階級に好まれるような高級住宅地になるよう、住宅や街並みの外観を変えていった。皮肉にも、田園郊外はレッチワースと同じ

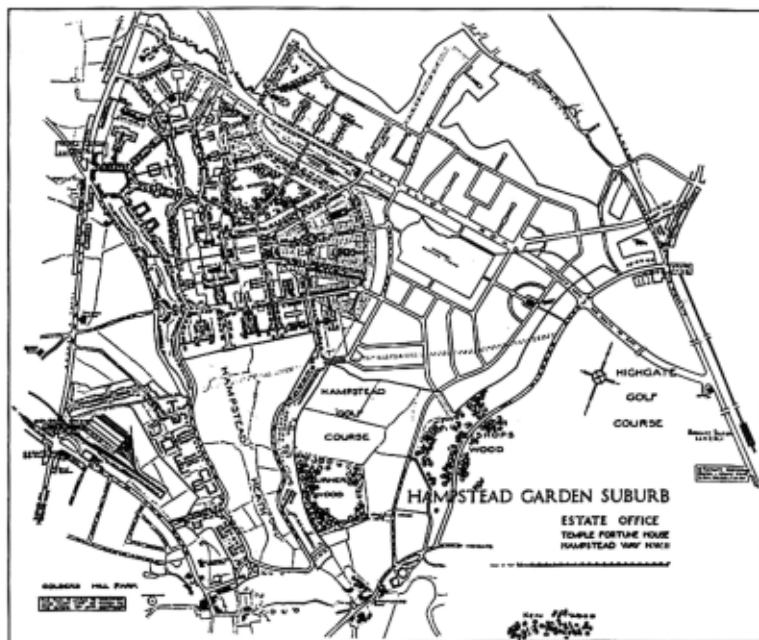


図3. ハムステッド・ガーデンサバーク (出典:バーネット、兼田訳、2000)

様、富裕層向けの郊外住宅地になるという結果になってしまったのである。

田園都市と田園郊外を結ぶものとして、レッチワース・ガーデンシティとハムステッド・ガーデンサバークの両方に携わっていた建築家レイモンド・アンウィンという人物を挙げることができる。彼は田園都市運動を論じる上で鍵となる人物である。田園都市実現に貢献し、ハワードのアイデアを現実のものとした。しかし、ハワードの考え方に完全に賛同していたというわけではなかった。ハワードの構想した都市づくりは、まったく手つかずの土地に自立的な都市を建設するという方法だった。一方アンウィンは都市全体をつくりだすことより、ロンドンのベッドタウンとしての郊外の方が現実的であると考えていた。アンウィンは、田園都市より田園郊外の方を気に入っていたようだ⁽²¹⁾。

アンウィンはもともと労働者の住宅を設計するなど、住宅の基準の改善に興味を持っていた。田園都市運動が起こる以前、19世紀から20世紀にかけて、主に工業都市で工業村(工業モデル・ヴィレッジ Industrial Model Village)と呼ばれる村がつくられていた⁽²²⁾。工場主が労働者たちのために住居やその他生活に必要な施設を用意したのだが、その村全体が一つの社会として成り立っていた。そのような点で自足的な性質を持っており、田園都市のモデルとされたとも言われている⁽²³⁾。その工業村のひとつ、ヨーク(York)近郊のニュー・

イヤーズウィック (New Earswick) の設計をアンウィンとパーカーが行った。ここでの経験がレッチワースやハムステッドで活かされている。

アンウィンとパーカーによる新しい都市デザイン理論は、大変な速さで海外へと広まった。アンウィンの著書『実践の都市計画 (Town Planning in Practice)』(1909) は、ドイツ語、フランス語等にも翻訳され、多くの国で読まれた。1909年には王立英国建築家協会都市計画会議 (Town Planning conference of the Royal Institute of British Architects) を設立したが、これが田園都市運動の頂点であった。⁽²¹⁾

4. 田園都市の実際―田園都市は実現したか

田園都市と呼ばれるものがレッチワースとウエルウィンに建設されたが、果たしてまさにハワードが思い描いた「田園都市」が実現したかどうかは、はっきり述べることは難しい。第二の田園都市ウエルウィンに関しては、先ほど述べたように途中でニュータウンになってしまっている。だから純粋に田園都市と呼べるのはレッチワースだけである。そのレッチワースも、ニュータウン法の適用⁽²⁵⁾や、その他田園都市の大原則を揺さぶるものがなかったわけではない。田園都市やそれに準ずるもの为目标とした都市の建設は、ほとんど

成功していないと言える。それほど田園都市は実現が難しいものであることを物語っていると考えるのではないだろうか。

ハワードが著書で示し、自身で実現しようとした田園都市には、その実現を難しくしたいくつかの欠点があった。まず第一に、人為的に都市をつくり出そうとしたことが挙げられる。イギリスでは、特に土地と人々が結びついているなどと言われるが、全てを取り壊して一から計画的に作り上げるといふ都市開発の仕方への理解は古くから高くなかった。同じように、たとえまだ都市化していない地だと言っても、その地と無縁の人間が新たに新型都市をつくり上げるといふのは、発想としては目新しく面白そうだが、どうにも受け入れられるものではなかったのではないか。

第二の点は、経済的な問題である。田園都市建設費用を、住宅問題に直面している当の労働者や貧困層が払うわけではない。ハワードは運営の仕方について財政面からも詳しく説明したが、それも充分とは言えなかった。結果的に富裕層のみが住まうことのできる都市だけしか実現することはできなかった。住民は直接都市の運営に携わることを求められたが、田園都市の理念に賛同するということが前提とされていた。つまり田園都市がいかなるものであるか理解し、さらにはその理念に基づいて共に都市をつくり上げようという意思のあるものが住民となり得たことを意味する。おそらく、そのためにはある程度の教養も要求されたと考えられる。その地域のコ

コミュニティに暮らすという意識が持てるのは、やはりある水準以上の暮らしをしている者に限定されるだろう。その意味で、もしあらゆる層の人々が共に生活するコミュニティをつくり出すことが田園都市の目標であったなら、そのような労働者にも理解できるような説明の仕方や、ある意味での教育がされるべきであったのではないか。もしそのような努力がなかったとしたら、最初から労働者を排除した構想とみなされても仕方がないだろう。その点で田園都市をつくりあげるとは、計画する側と住む側がひとつの社会を形成するのだという意識がない限り不可能である。一般的な集落にはその社会をつくってきた歴史があり、それを先祖代々受け継ぎ、住民が共有している。そのような原点なしで、同じ地域に住む人々がただ物理的に隣接しているのではなく、協力して一つのコミュニティをつくっていくこうとするという試みは近代までではなかったことである。その意味で田園都市は都市の歴史への挑戦であり、かつ都市の新しいベクトルを示すものであったと言えるだろう。

おわりに

都市づくりが国家ではなく民間によって行われるようになることで、都市が自然発生するものではなく、そこで暮らすことを自ら選択した人々によって形成されるものへと変化した。そして、都市や

そこでの生活はお金を出せば手に入るものになった。しかしお金を払ってより高い水準の生活をしようとするのは、当然すでに経済的な余裕を持つ人々に限られた。その購買層の要望を満たし、期待を抱かせることは住宅水準を自然と上げることになり、そこから高級感の漂うデザインが採用されることになったのである。それは財政的な理由から、行政による開発では当然実現が困難なものであった。土地を贅沢に使い、緑も豊富に含んだデザインは、当時では他に見られないような独特のもので、他の住宅地との差異化が図られている。それが独自の都市景観を生み出し、それまで見たことのないような新しい次世代の都市生活を想像させた。ハウードの構想の原点は、都市を変えることで社会そのものを変えるということだった。しかし逆に社会を変え、生活が豊かになれば、都市も快適で美しくなるということを暗に示す結果となった。それが幻想に終わった部分があることは否定できないが、田園都市生活を誰もが享受できる可能性を少なからず示した。そういう夢を持たせるようなイメージこそが田園都市が持つ力であったと言える。

註

(1) 大島葉月「近代イギリスにおける景観美と都市構想」、2008（広島大学総合科学部学士論文）、大島葉月「ロンドンと田園都市の夢―近代イギリスにおける都市景観美の展開―」、2010（広島大学大学院総合科学研究科修士論文）。

- (2) ウィリアム・アシユワース『イギリス田園都市の社会史』下総薫訳、御茶ノ水書房、1987。
- (3) 都市に関する初期の法律としては、公衆衛生法(1848)、労働者住宅法(1868)、労働者住宅改良法(1875)などが挙げられる。
- (4) ハワードは社会改良家。当初事務員として働いていたが、後に農業のためにアメリカへ渡る。当時田園都市と呼ばれたシカゴの街を見て、田園都市のヒントを得た(Oxford Dictionary of National Biography Vol. 28 Oxford University Press 2004, "Howard, sir Ebenezer")。
- (5) ハワード、エベネザー『明日の田園都市』長素連訳、鹿島出版会、1969。
- (6) ハワードは『明日の田園都市』の中で、「ただし、作図は、単なる示唆にすぎず、おそらく実際とは大いに異なるものであろう」と述べている。示されているダイアグラムの中でも「土地が決まるまで設計図は描かれてはならない」「設計図は選択された土地によらなければならない」と書かれている(図1参照)(前掲書、1969)。
- (7) アンウィンはウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)の影響を受け、ヴァナキュラーな(その土地固有の)建築を復興することを目指した(西村幸夫編『都市美―都市景観施策の源流とその展開』学芸出版社、2005)。
- (8) 上掲書(ハワード、1969)。
- (9) チェリー、E・ゴードン編『英国都市計画の先駆者たち』大久保昌一訳、学芸出版社、1983、110ページ。
- (10) 前掲書、110ページ。
- (11) 最初の郊外住宅地と言われるベッドフォード・パーク(Bedford Park)は1877年に建設された。
- (12) 上掲書、110ページ。
- (13) 株の配当金の上限を引き上げた。また、商業用の土地に関しては長期貸付をせず、高い賃料で短期間の契約とした。
- (14) 西山八重子『イギリス田園都市論とニュータウン政策』金城学院大学論集、1998。
- (15) Oxford Dictionary of National Biography Vol. 3 Oxford University Press 2004, "Barnett, Dame(Mary) Henrietta", p.1024.
- (16) 西村幸夫編『都市美―都市景観施策の源流とその展開』学芸出版社、2005。
- (17) 1929年に、アメリカのラドバーン(Rudburn)で田園都市の建設が始められた。エベネザー・ハワードの考えを継承し、イギリスの田園都市のような都市をつくり出す計画がされた。当初256ヘクタールの土地に、計画人口2万5千人の自己完結型の都市が建設される予定であった。しかし世界恐慌による経済的な問題から規模が縮小され、自立都市とすることは不可能になった(最終的に、全体で60ヘクタール、人口3千人、670戸の住宅地の規模までしか建設されなかった)。そこで工業と緑地帯は省かれることになり、ハワードのダイアグラムの中心から遠い部分が切り落とされ、学校、住宅、商業地が残される形となった。そのため、田園都市論が本来持つ特徴が失われ、ただの郊外住宅地になってしまったとも指摘されている。また当時自動車普及し、自動車交通が発達しはじめたという背景から、歩車分離がひとつの大きな焦点として取り上げられている。通過交通を排除する方法として「スーパーブロック(商業・住宅地域を含む大街区)方式」が採用された。スーパーブロックの周囲を自動車道路が囲むことで、通過する自動車交通を遮断した。スーパーブロックは通り抜けを防ぐための方法として、20世紀の初めからピッツバーグやロサンゼルスなど各都市で採用され始めた。ラドバーンではそのスーパーブロックを一つの単位として、いくつかの街区から町全体が構成される計画であった。スーパーブロックの周囲には、幅の広い自動車用幹線道路を建設し、内側にはクルドサックをつくった。スーパーブロック間は車道と歩道を立体交差させて歩車分離をし、歩行者の安全を確保した。ラドバーンの計画は高く評価され、今や「ラドバーン方式」として広く知られている。ニューディール政策にも取り入れられ、ラドバーン方式に基づいた住宅地開発が計画された。それは後に、1946年ニュータウン法以降始まったイギリスのニュータウン建設に取り入れられるなど、海外へも大きな影響を与えた。(戸谷英世、成瀬大治『アメリカの住宅地開発―ガーデンシティからサステイナブル・コミュニティへ』学芸

- 出版社、1999.)
- (18) ロンドン中心部のヴィクトリア公園は、娯楽の場としてだけではなく、政治的な活動を行う場としても利用されていた。社会民主同盟やチャーチスト運動家たちが公開討論を行っていた。
- (19) Heath (英) ヒースの生えた荒地のこと。自然を楽しむ場として市民に利用される。
- (20) 中島直子『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動—その思想と活動—』古今書院、2005、146ページ。
- (21) アンウィンは1904年から1906年までレッチワースに住んでいたが、その後ハムステッド・ガーデンサブバンプに引越し、1987年に亡くなるまでそこで暮らした。
- (22) 石鹸会社リーバーのポート・サンライト(リパブル)、チョコレート会社キヤドバリーのボーンヴァイル(バーミンガム)など。リーバーのウィリアム・リーバー(William Lever)とキヤドバリーのジョージ・キヤドバリー(George Cadbury)はハワードが設立した田園都市協会(Garden City Association)に参加し、田園都市建設に協力した。
- (23) 片木篤『イギリスの郊外住宅—中流階級のユートピア』住まいの図書館出版局、1987。
- (24) *Oxford Dictionary of National Biography* Vol. 55 Oxford University Press 2004.
- (25) イギリスでは戦後国家政策としてニュータウンの建設が行われた。1946年にニュータウン法が制定される。主な目的は、ロンドンから溢れ出した人口を収容することであった。ニュータウン法が適用されれば国家による安定した運営が保証されることから、レッチワースでもその適用は検討された。だが住民の完全な賛成は得られなかった。

参考文献

- ・アシユワース、ウィリアム『イギリス田園都市の社会史』下総薫訳、御茶ノ水書房、1987。
- ・片木篤『イギリスの郊外住宅—中流階級のユートピア』住まいの図書館出版局、1987。

- 版局、1987。
 - ・近藤茂夫『イギリスのニュータウン開発』至誠堂、1971。
 - ・高橋哲雄『イギリス歴史の旅』朝日出版社、1996。
 - ・戸谷英世、成瀬大治『アメリカの住宅地開発—ガーデンシティからサステイナブル・コミュニティへ』学芸出版社、1999。
 - ・チェリー、E・ゴードン編『英国都市計画の先駆者たち』大久保昌一訳、学芸出版社、1983。
 - ・中島直子『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動—その思想と活動—』古今書院、2005。
 - ・西村幸夫編『都市美—都市景観施策の源流とその展開』学芸出版社、2005。
 - ・西山八重子『イギリス田園都市論とニュータウン政策』金城学院大学論集、1998。
 - ・バーネット、ジョンナサン『都市デザイン—野望と誤算』兼田敏之訳、鹿島出版会、2000。
 - ・ハワード、エベネザー『明日の田園都市』長素連訳、鹿島出版会、1969。
 - ・*Oxford Dictionary of National Biography* Vol. 3 Oxford University Press 2004, "Barnett Dame (Mary) Henrietta" pp.1022-1025.
 - ・*Oxford Dictionary of National Biography* Vol. 28 Oxford University Press 2004, "Howard, sir Ebenezer" pp.330-333.
 - ・*Oxford Dictionary of National Biography* Vol. 55 Oxford University Press 2004, "Unwin, sir Raymond" pp.911-914.
- (おおしま・はづき 広島大学大学院修士課程)